平成26年3月1日発行　第45巻 第3号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊

# 地域保健

3
2014

●特集

## 東日本大震災から3年 ―これまでとこれから

●フロントランナー

新田幸恵さん（西会津町 健康福祉課 健康支援係 保健師長）

●ピープル

都鳥伸也さん（映画監督・プロデューサー）都鳥拓也さん（映画撮影・編集・プロデューサー）

FRONT RUNNER
フロントランナー

福島県
西会津町

# 新田幸恵さん

● 西会津町 健康福祉課 健康支援係 保健師長

## 西会津の特性を自ら分析し、よりよい保健事業を展開したい

## 高齢化先進地域での百歳を目指した取り組み

文：太田美由紀（ライター）　写真：カミヤス セイ

磐梯山に薄く雪が積もった初冬、福島県の西北部、新潟県に隣接する西会津町に向かった。東京からは東北新幹線で郡山、そこから磐越西線に乗り換える。列車は3両編成だが平日は人もまばら。列車の利用は登下校時の学生が中心で、地元の人は車が中心の生活なのだろう。磐梯山を右手に眺めながら森や田畑を抜け、郡山からおよそ2時間半で、西会津町役場の最寄り駅、野沢にたどり着いた。

西会津町の8割以上は山林で、人口は約7500人(2013年1月現在)。

豊かな自然が残る昔ながらの田舎の風景が広がる。大山祇神社(おおやまずみじんじゃ)、如法寺鳥追観音(にょほうじとりおいかんのん)などもあり、「会津の霊地」としても知られている。のどかな地域ではあるが、保健事業を語る上ではいろいろな意味で日本でも20年、30年先を行くといわれる西会津町。健康福祉課健康支援係に所属する保健師長、新田幸恵さんにお話をうかがった。

## 祖母の思いを引き継ぎ看護師を目指した

新田家は長く西会津で暮らしてきた農家で、幸恵さんで22代目となる。出産後に赤ちゃんを連れてお参りする三十三観音参りや、西会津ならではの食文化、戊辰戦争当時のことなどが現在でも語り継がれ、先祖からの習わしや心を大切に受け継ぐ人たちが多く暮らすこの地域で、幸恵さんはすくすくと成長した。

「東京で生まれましたが、4歳のころに父が家を継ぐことになりこちらに戻りました。祖父母と両親、兄との6人暮らしになったものの、こちらでは大家族とはいえません。最近は子どもの数もずいぶん減ってしまいましたが、当時はきょうだいが5、6人いる家族は当たり前で、とても楽しそうでうらやましかった。友達の家はきょうだいでソフトボールができるけど、うちはバドミントンくらいしかできないねと兄と話したのを思い出します」

豊かな自然の中で近所の子どもたちが集まり、缶けり、だるまさんが転んだ、雪合戦をはじめ、幅広い年齢の子が大勢で一緒に遊べる遊びをみんなで考え、日が暮れるまで遊んでいたという時代。新田さんはいつも真っ黒に日

特集

# 東日本大震災から3年

## これまで と これから

東日本大震災から３年。この間、国民の防災意識は急速に高まり、南海トラフ地震対策など新たな自然災害への備えも進んでいる。しかし、被災地に関する報道は目に見えて減り、国民の心に占める被災地への想いも小さくなりつつあるようだ。被災地は、そして被災地の保健師の活動は、いまどうなっているのだろうか。特集では過去３年間の保健師活動の道のりを振り返りつつ、現状を報告する。


P12 「はまってけらいん、かだってけらいん」
《陸前高田市からの報告》
◎佐々木亮平（岩手医科大学）

P18 住民主体の復興で生活不活発病予防
《南三陸町からの報告》
◎髙橋晶子（南三陸町）

P24 地域を肌で感じつつ、市民とつながり見守る体制づくり
《東松島市からの報告》
◎大内佳子（東松島市）

P32 安心して住める市をめざして
《南相馬市からの報告》
◎大石万里子（南相馬市）

P38 復興をめざして市町と心ひとつに
《県保健所からの報告》
◎阪本喜恵子（宮城県東部保健福祉事務所）

P44 放射線より地区組織の立て直しが課題
《川内村にみる健康課題と保健師活動》
◎渋井哲也（ジャーナリスト）




　写真：カミヤス　セイ

東日本大震災から3年

これまで と これから

# 「はまってけらいん、かだってけらいん」

## 陸前高田市からの報告

岩手医科大学
佐々木亮平
（ささきりょうへい
いわて東北メディカル・メガバンク機構
臨床研究・疫学研究部門 特命助教）

奇跡の一本松に象徴される岩手県陸前高田市。年月の経過とともに「見えない被災」「見えない孤立」に対する支援活動も始まっている。震災直後から支援に入っている佐々木亮平さんの報告。

### 「奇跡の一本松」だけが残ったまち…

私は東日本大震災（2011年3月11日）を当時勤務していた日本赤十字秋田看護大学のある秋田市で経験しました。

限られた情報しかない中、1年前まで保健師として勤務していた陸前高田市にたどり着くことができたのは発災から5日目（3月16日）でした。わずか1カ月ほど前に元同僚保健師の結婚式が現地であり、訪れていたその地は、「奇跡の一本松」だけを残し「まちそのもの」が跡形もなくなっていました。人的被害も甚大で死者・行方不明者は1800人近くにのぼり、市役所職員も約3割が犠牲となり、元同僚の保健師も9人中1人は入院、6人は安否が分からないという状況でした[1]。

### できていたことはできる、できていないことはできない

「1000年に1回」といわれたこの災害ですが、「1000年に1回の支援体制」が欲しいと、発災直後から強く感じていました。あの状況下では、「いいか悪いかよりも、できるかできないか」という判断で誰もが行動していました。それはいわば平時からの活動の延長であり、一つひとつの積み重ねが有事の健康危機管理につながるということを、この3年の間に多くの皆さんの中でも確認され続けていると思います。

私も大学の理解と協力を得、最初は日本赤十字社秋田県支部の医療班として通い続け、5月からは本誌での報告の機会を1年間にわたっていただきました[2]。連載を通じて、地域保健や公衆衛生活動の本来あるべき姿について、そして自分には何ができるのかを全国の皆さんとともに考えることができました。その後の2年間も、被災直後から開催している陸前高田市保健医療福祉包括ケア会議（2012年4月から陸前高田市保健医療福祉「未来図」会議に名称変更）[3]の運営や調整などを中心に、公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長・岩室紳也先生と通い続けながら、重層的な被災地との協働体制の実際として「陸前高田市のいま」を発信し続けています[4]。ただ発災直後と異なり、最近は他地域からの助言をいただけていない、自分たちだけで完結せざるを得ない状況が続いていることを深く反省しています。

### 「見える被災」と「見えない被災」、そして見えない孤立

震災直後に全国の支援チームの皆さんの応援をいただき、全戸家庭訪問による健康生活調査を実施しました[5]。それはいわば、保健師活動の原点でもあり、統計情報や二次資料だけで地域を診断するのではなく、有事だからこそ地域に出向き直接肌で感じたことを計画や今後の対策に反映していくための有効な手段であったと考えます。同時に当時からこの訪問自体が「ケア」であり、要援護者をすくい上げるハイリスクアプローチの側面だけでなく、被災した地域全体に広がる「一人ひとりの心に寄り添ったケアが行えていない」というリスクに対するポピュレー

# みんなが元気で健康になるために頑張りたい

## 復興のために、出来る限りのことを

栃木芳将（とちぎよしゆき）さん
●気仙沼市保健福祉部
地域包括支援センター

文＝白井美樹（ライター）　写真＝ C.Kent

## 幅広くいろんな人とかかわりたい

気仙沼市に保健師として赴任してきて、3年目となる栃木芳将さん。現在配属されている保健福祉部地域包括支援センターの扉をたたくと、周囲の空気を一瞬にしてさわやかに変えるような笑顔で出迎えてくれた。

出身地を尋ねると、少し間を置いて、「いちばん長く育ったのは、岩手県遠野市です」との答え。実は、幼少時代は、国家公務員のお父さんの仕事の関係で、おもに東北地方の各地を転々としていたので、故郷というと、5歳から18歳まで住んでいた遠野市になるのだそうだ。

その遠野市では、野球少年として周囲に知られていた。

「小学3年生から大学時代までずっと野球をやっていました。高校は沿岸部にある釜石南高校（現在は釜石高校）へ進学し、甲子園をめざして、毎日練習に励んでいましたね」

いかにもスポーツマンらしいたたずまいは、そんな少年時代にルーツがあるのだろう。

ちなみに、2人の弟も野球をやっていて、子どものときはいつも近くの公園でキャッチボールやバッティングをして遊んでいた。みんな坊主頭だったので、近所の人からは「マルコメ三兄弟」と呼ばれていたそうだ。

ところで、保健師になるための最初の扉が開かれたのは、高校の選択コースを決めるときだった。

「父方の親戚に、医師や看護師がいるのですが、いちばん患者さんに近いところで役に立てる仕事っていいなと思いました。なので、初めは看護師として医療にたずさわりたいと思ったのです。当時はまだ男性の看護師は少ない時代でしたが、やりがいのある仕事だと感じていました」

その志のもと、迷わず進学したのが宮城大学の看護学部だった。しかし4年生の実習で、子どもの健診や新生児訪問を経験したことで、地域で暮らす人にとって、保健師さんの力が大事だということを認識した。

「病院の中にいると、病気やけがをしている人のケアが中心ですが、保健師ならもっと幅広く、いろんな人にかかわれるなと思いました。それに子どもが大好きですし、おしゃべりなので、保健師に向いていると感じたのです」

## 故郷と似ている気仙沼へ
### ―震災の年

4年時に看護師から保健師への方向転換を図り、就職先には気仙沼市を選